

軽度発達障害があると思われる子どもに対する 集団の中での指導について

— 津市立教育研究所主催の研修会に参加した教師へのアンケート調査から —

栗原 輝雄*・長谷川哲也**・藪岸加寿子**・植谷 幸子**

軽度発達障害があると思われる子どもに対する集団の中での指導について、津市立教育研究所主催の研修会に参加した教師にアンケート調査を実施した。回答者のうち約半数が現在、通常の学級において軽度発達障害があると思われる子どもを担任しており、日々の教育活動の中での困難点として、(1) 子どもの特性に応じた指導方法について (56.5%)、(2) 学級の他の子どもへの対応 (30.6%)、(3) 保護者との関係づくり (8.1%)、(4) 他の指導者との間での連携 (4.8%) をあげていた。学級の集団の中での指導にかかわる点で多くの教師が困難を抱えている現状が明らかとなった。こうした点の改善・解決にかかわる内容を今後の研修内容として要望していることも明らかになった。軽度発達障害があると思われる子どもを担任する通常の学級の教師とともに教育実践をすすめ研修を深めていくための今後の方向につき、ヒントになる貴重な示唆を得ることができた。

キーワード：軽度発達障害、集団、特別支援教育、教師、アンケート調査

I 問題および目的

「今後の特別支援教育の在り方（最終報告）」⁽¹⁾では「障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応して効果的・効率的な教育を行う」ことの重要性が改めて指摘されているが、これは「従来の特殊教育の対象の障害だけでなく、LD, ADHD, 高機能自閉症を含めて障害のある児童生徒」すべてにわたって同様に重要であることは言うまでもないであろう。

LD, ADHD, 高機能自閉症を含めた、知的障害を伴わない発達障害は軽度発達障害と呼ばれており、これらの障害があると思われる子どもは通常学級に6.3パーセントの比率で存在すると言われている。今や、どの学校においても、教師たちが日常的に出会う子どもたちであると思われる。^{(2) (3)}

筆者らは津市立教育研究所に所属あるいは関係している。(栗原は2003年3月までここでの

教育相談専門員として教育相談を担当し、現在は大学教官の立場で、三重大学教育学部附属教育実践総合センターの研究員として、同じくこのセンターの研究協力員である三名の共著者とともに、特別な支援が必要と思われる子どもとその親や教師への支援のあり方をテーマに、共同研究を行っている。)津市立教育研究所でも、就学相談・指導の場や、幼稚園や保育所、小・中学校等からの教師等へのコンサルテーションの依頼、保護者への教育相談や子ども自身への直接指導等において、軽度発達障害があると思われる子どもとの出会いを数多くもっている。

そうした子どもの特性や心理等についての人々の理解と関心はまだ必ずしも十分とは言えず、学校での指導、特に集団の中での指導・支援の方法についての研究はまだこれからという感が強いように思われる。軽度発達障害があると思われる子どもの指導・支援にはさまざまな側面がある。そうした子ども自身の情緒的・社会的適応の促進や学習支援等といった、本人自身の心理面・学習面への支援もさることながら、家族への支援も欠かせない。また、そうした子

* 三重大学教育学部障害児教育講座

** 津市立教育研究所

子どもが通常の学級にいる場合、集団の中での支援は極めて大きな意味をもっているが、教室での指導場面等でそうした子どもの学習参加や周囲の子どもとの関係、そしてまた、そうした子どもと周囲の子どもたちとの関係作りに、担任教師は苦慮することも少なくない。以上のようなことは軽度発達障害があると思われる子どもの支援におけるテーマの幅の広さを物語っていると思われる。

筆者らは、ここに掲げたテーマのそれぞれを視野に入れながら、今後、継続的に検討を進めていく予定であるが、本論文では、これらのテーマのうち、軽度発達障害があると思われる子どもにかかわる教師が特に集団の中での指導・支援という点をかかえていると思われるさまざまな問題・課題をアンケート調査の結果から、整理し明らかにしていくことを目的とする。このことを通して、そうした子どもたちの指導方法等の検討と教師支援のあり方等について、今後、さらに考察を深めていくための手がかりを得ることができればと考えている。

II 方 法

1. 調査方法：アンケート調査による。
2. 対象者：津市立教育研究所が平成15年度に開催した研修会（軽度発達障害がある子の心理の見方・とらえ方や支援方法等に関する研修会）に参加した幼稚園、小学校、中学校に勤務する教師。そのうちの114名から回答があった。

これらの教師を対象者としたのは、軽度発達障害があると思われる子どもの理解や指導・支援に日ごろから関心があったり、さまざまな問題・課題に直面していたりして、本研究テーマについてさまざまな意見を出してもらえ、可能性が高いと考えたからである。

年齢構成や養護学校・障害児学級勤務経験の有無や年数は表1～表3に示すとおりである。

表1. 年齢

20代	11名
-----	-----

30代	27名
40代	48名
50代	23名
不明	5名

表2. 養護学校への勤務経験

ある	3名
ない	103名
不明	8名

表3. 障害児学級の担任

ある	29名
ない	79名
不明	6名

3. 調査項目について：「軽度発達障害があると思われる子どもの指導において、日々の教育活動の中で困難を感じていること」、「軽度発達障害があると思われる子どもへの対応に関して今後どのような研修を受けていきたいか」等につき、多肢選択法と自由記述法の組み合わせによって回答してもらった。（調査対象者を研修会に参加した教師としたので、今回作成した調査項目の中には次年度以降の研修会のあり方等についての要望等も記してもらう項目も含まれている。）調査用紙の内容は論文末尾に掲げられている通りである。
4. 調査手続き：調査用紙を対象者に送付し、回答後、返送してもらった。
5. 調査期間：平成15年12月下旬から平成16年1月上旬まで。

III 結 果

1. 日々の教育活動の中での困難点

全回答者（114名）中の62名の回答者が現在、軽度発達障害があると思われる子どもにかかわっていた。（表4）これらの回答者の回答内容を示すと表5のようになる。

表 4. 特別な支援の必要な子ども

いる	60名
いない	26名
わからない	20名
不明	8名

表 5. 困難を感じる点について (62名)

子どもの特性に応じた指導方法について (35名)

- 子どもの特性の理解
- 子どもとの信頼関係の作り方
- 子どもへの適切な対応や支援の内容
- 効果的な学習内容と方法
- 生活面への指導内容と方法
- パニックをおこしたときの対処方法
- ソーシャルスキルトレーニングの方法
- 集団の中での指示や課題の出し方
- 他の要因によりよく似た状態にある子どもとの判別

学級の他の子どもへの対応について (19名)

- 周囲の子どもの理解に対する指導
- 子どもへの適切な対応と全体への指導のバランス
- 周囲の子どもとのトラブルの調整と予防
- 個人対応をしていると他の子どもへの指導が出来ない

保護者との関係づくりについて (5名)

- 保護者の子どもへの対応に対する指導
- 周囲の子どもへの理解に対する保護者の協力

他の指導者との間での連携について (3名)

- 子どもの状態が急変した場合、関わっている教師間の連絡
- 教科担任制などにより複数の教師が関わる場合の児童生徒の共通理解
- 学校全体で子どもを支援していくという意思統一と研修の必要性

回答は自由記述でなされたので、筆者らが内容面から4つのカテゴリーに分類した。各カテゴリーに含まれる回答内容もあわせて記してある。

「子どもの特性に応じた指導方法について」困難を感じている回答者は全体の 56.5パーセ

ントにのぼった。軽度発達障害があると思われる子どもをいかに理解しどう指導していったらよいか、回答を寄せてくれた教師にとってかなりの程度において共通する悩み・課題であり、また日々の教育活動の中でこの点に心を砕いているようであることがうかがえる。以下、「学級の他の子どもへの対応について」を挙げた教師が30.6パーセント、「保護者との関係作り」についてが8.1パーセント、「他の指導者との間での連携について」が4.8パーセントとなっている。

「子どもの特性に応じた指導方法について」と「学級の他の子どもへの対応について」を合わせると回答全体の87.1パーセントとなる。軽度発達障害があると思われる子どもへ個別的直接的な指導・支援のあり方を含め、自分の担任する学級を全体としてどう運営していったらよいか、学級の子どものよき関係作りを集団の中でどのように進めていったらよいかという点で、教師としての苦悶があるようである。

2. 今後の研修について

(1) 内容

回答結果は表6の通りである。

表 6. 内容 (114名:複数回答可)

通常学級における活動の中でどのように支援していくかについて	81名
LD・AD/HD・アスペルガー症候群・高機能自閉症など、軽度発達障害児の特性について	64名
学校全体としてどのように支援していくか	59名
軽度発達障害児を一斉の教科指導の中でどのように支援していくかについて	59名
保護者と教育相談のあり方について	47名
相談機関や医療機関へどのようにつないでいくか	47名
特別支援教育をめぐる現状	43名

「通常学級における活動の中でどのように支援していくか」が最も多く、以下、「軽度発達障害児の特性について」「学校全体としてどの

ように支援していくか」「軽度発達障害児を一斉の教科指導の中でどのように支援していくか」などが上位にランクされている。これらの内容は「1. 日々の教育活動の中での困難点」で述べた「困難点」として上位にランクされていた2つのカテゴリー、「子どもの特性に応じた指導方法について」と「学級の他の子どもへの対応」と内容的に符合している。困難点と感じている点についてであればこそ、今後の研修テーマとして望んでいること、そして、今後の研修を通して現在抱えている困難点の克服をはかっていきたいという願いが反映されているということであろうか。

(2) 形式と講師

形式については表7に、講師については表8に掲げられている通りである。

表7. 形式 (114名:複数回答可)

講義と実技	64名
事例検討方式	64名
講演会方式	41名
パネルディスカッション方式	6名
シンポジウム方式	2名

表8. 講師 (114名:複数回答可)

教育現場の実践者	89名
心理関係者	77名
医療関係者	61名
大学関係者	9名

講演会形式やパネルディスカッション方式、シンポジウム方式のような、どちらかという受身の形式よりも、講義と実技、事例検討方式などのような、自身の理解や課題解決に直結する、積極参加型とでも呼んでよいと思われるようなかたちのものをより強く望んでいる様子が見える。また講師については、軽度発達障害があると思われる子どもの教育実践や臨床実践に直接取り組んでいる人をより強く望んでいるという結果であった。

IV 考 察

1. 子どもの特性に応じた指導方法について

子どもの特性に応じた指導方法について、回答者の半数以上のものが困難を感じていることが表5から読み取れた。軽度発達障害があると思われる子どもの特性を知り、その特性を踏まえつつ、目の前の当該の子ども発達面・学習面等の支援を強めていきたいが、その特性がなかなか把握しがたいところがあってとまどっているのが実情だ、ということメッセージとして投げかけているということなのだろうか。回答者の具体的な記述内容を見る限り、自身の学級の中にいる軽度発達障害があると思われる子どもに対し排他的・拒絶的な態度を表していると思われる項目は見られない。もっとも、この調査に対する回答者は、もともとこうした子どもの指導・支援に積極的関心をもって研修会に参加している教師であったからであろう。

2. 保護者との関係について

保護者支援は多くの場合、親支援ということになるだろうが、この親支援と、子どもの指導・支援における親との連携の重要性については言うまでもないであろう。しかし、親の障害理解・障害受容の状態をよく知り、これらを十分踏まえたうえで親支援や親との連携がなされないと、コミュニケーションにズレが生じやすく、連携そのものもうまくいかないことになるであろう。特に子どもの年齢が低いというだけでなく、子どもの発達の遅れがまだはっきりせず、親が子どもの発達上の問題・課題と向き合う段階にきていない場合などは、親のその子どもに対するかかわり方についての教師のコメントや、園や学校での他の子どもとのかかわり方についての教師の方針等が十分に理解されないこともある、と自由記述の中で述べていた教師もいた。

3. 学級の他の子どもへの対応について

障害のある子に対し、担任教師が温かい目を向けて発達支援・学級適応に努力しても、学級や学校の他の子どもたちもそうした子どもに温かい目を向けることがなければ、当該児童の発達や学習、対人的適応等の支援はうまくいかな

いであろう。場合によっては、当該児童が学級の他の子どもの批判的・拒絶的あるいは非好意的態度を敏感に察知して、自分に温かい目を向けてくれる教師との個人的接触を強化していき、結果的には、学級の他の子どもとの関係において悪循環を起し、ますます孤立していつてしまうこともあるであろう。

一方、教師の方も、そうした当該児童との一対一のつながり、言い方を換えれば「閉じられた関係」を強めることで、学級の他児たちからの不平・不満を招き、学級運営がうまくいなくなり、時には「学級崩壊」に発展してしまうこともないとは言えないであろう。さらには他の子どもたちの不平・不満を背景として、当該児童との関係が重くなってしまい、当該児童に他する受容的態度を崩していつてしまうこともないとは言えないであろう。このような場合、当該児童の心には喪失感や敵意やフラストレーション等が生じ、担任との関係のみならず学級の他の子どもとの関係もますます悪化してしまうことも懸念される。表5に示されている記述内容は上記のことを具体的にあらわしているように思われる。

軽度発達障害があると思われる子どもを担任している教師の経験的背景はさまざまである。これまでずっと通常学級の担任をしてきた教師でも、これまで担任してきたクラスの中に軽度発達障害のある子がいて、その子どもへのかかわりの経験を持っている教師もいれば、そうでない教師もいるであろう。本研究におけるアンケート調査協力者のなかにもあったように、現在は通常学級の担任をしていても、過去に養護学校勤務の経験を持っていたり、障害児学級の担任をしていたりしたことがある人たちがいた。このような人たちの中にはそうしたところで軽度発達障害がある子どものかかわりの経験を持っていた人たちもいるかもしれない。

したがって、このようなことを考慮すれば、表5に示されている、(1) 子どもの特性に応じた指導方法について、(2) 保護者との関係について、(3) 学級の他の子どもへの対応について、(4) 他の指導者との間での連携について、の各

カテゴリー中の具体的項目についても、その困難度の軽重は変わってくる可能性もある。今回の調査からは、項目設定上このようなことについて詳細に検討することはできなかったが、今後、このような点についても検討する必要があるであろう。教師の経験的背景を踏まえたうえでの教師支援という観点が必要と思われるからである。

4. 他の指導者との間での連携について

表5に掲げられている具体的記述内容は教育現場で軽度発達障害があると思われる子どもと日々かかわっている教師であればこそこの回答であるように思われる。スクールカウンセラーや同じ校内の障害児学級担当者、近隣の養護学校等の教員、教員研修担当機関、大学等の研究機関等の資源を有効に活用することも重要であろう。あわせてこれらの人たちの間の有機的な連携も大切であろう。事例検討等のかたちで連携していくことは担任教師に対する支援に終わらず、ひいては、当該児童の発達や学習、学級適応等の支援にも、そしてさらには、当該児童を取り巻く周囲の子どもにとっても、ともに育ち生きるという観点から大きな意味を有すると考えられる。

津市適応指導教室でもすでに採り入れているが、発達や適応や行動面などにさまざまな困難・課題を抱えている子どもに対し、大学生などが比較的フリーな関係でかかわっていくメンタルフレンド制度のようなものは、大学生自身にとっても生きた勉強になるし、またこうした人たちのうち、将来教員を目指す人たちが、大学での授業の一環として、教師の補佐役として学級場面で当該児童や他の子どもたちにかかわっていくことができれば、そのことは子どもたちにとってはもちろんのことだが、教師にとっても、本人にとっても大変有益なことだと考えられる。今後の課題の一つであろう。

V まとめに代えて一人間としての豊かな育ちという視点をー

軽度発達障害があると思われる子どものほとん

どは通常の学級に在籍していると思われ、この意味では、通常の学級の担任の理解と対応は、そうした子どもたちに対する教育的支援を大きく左右する重要な鍵になると思われる。今回の調査結果に示されているように、通常の学級の担任を中心とする、軽度発達障害があると思われる子どもを指導している教師はさまざまな困難を感じ、その解決のための支援を強く求めている現状も見過ぎてはならないであろう。⁽⁴⁾

このようなさまざまな困難の中にありながらも、指導・支援に当たっては軽度発達障害があると思われる子どもの「教育的ニーズ」をしっかりとおさえてかかることが必要であろう。「最終報告」の中には「一人一人の教育的ニーズ」という言葉が頻繁に登場する。この報告書のキーワードの一つといってもよいであろう。

「一人一人の教育的ニーズを把握」することは「当該児童生徒の持てる力を高め生活や学習上の困難を改善又は克服するため」の「適切な教育」と「必要な支援」にとって重要なことである。「一人一人の教育的ニーズを把握」することは、言葉を換えれば「(教育的) アセスメント」ということができる。「アセスメント」は心理検査や行動観察、面接などによってその子どもの発達や学習や行動などの実態あるいは特性を把握することであるが、それはあくまでもその子の「可能性をさぐる」ために行われるものであろう。⁽⁵⁾ それぞれの子どものもつ成長可能性や内在するもろもろのものを信頼しての上でのことである。⁽⁶⁾ この視点がないと「アセスメント」は「選別」や「決め付け」や「限界設定」につながりかねず、その子どものもつ成長可能性や内在するもろもろのものが「生き生きと息吹く」ようになるために⁽⁷⁾、子どもが今必要としているもの—つまりはこれが「教育的ニーズ」ということになるのであろうが—が見えなくなってしまうのではないか。

「教育的ニーズ」という言葉は本来はすべての子どもについて用いられる言葉であろうが、

特に発達障害などの障害がある子どもたちについて用いられる場合、「特別な(教育的) ニーズ」⁽⁸⁾という言葉によって表現されているようである。こうした子どもたちもまた、障害によって生じるさまざまな困難の改善にとどまらず、一人の人間としての豊かな育ちを求めているということを念頭において学校教育も進めていくべきだということを特に強調して「特別な(教育的) ニーズ」という言葉は使われていると受け取ってよいように思われる。今後の特別支援教育における教育実践にとっての重要な指針の一つとして受け止めたい。

文 献

- (1) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」2003. 3
- (2) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「同上報告書」
- (3) 杉山登志郎「動き出した特別支援教育—子どもたちの教育に求められているもの—」季刊・特別支援教育、No. 11, 2003. 11、Pp. 4-9.
- (4) 渥美義賢「通常の学級担任からみた特別支援教育—LD, ADHD, 高機能自閉症のある児童生徒の支援に向けて—」季刊・特別支援教育、No. 11, 2003. 11、Pp. 58-61.
- (5) 氏原寛他(共編)『心理臨床大事典』培風館、1992、Pp. 416-420.
- (6) 佐治守夫・岡村達也・保坂亨『カウンセリングを学ぶ—理論・体験・実習—』東京大学出版会、1999、pp. 23-75.
- (7) 森田ゆり『エンパワメントと人権—こころの力のみなもとへ—』解放出版社、1998、Pp. 17-18.
- (8) Lynn Stow & Lorna Selfe “Understanding children with special needs” Unwin Hyman, 1989, p. 17.

アンケート調査用紙

I あなたご自身のことをお聞きします。さしつかえなければ下記の項目にお答えください。(該当する番号を○で囲んでください)

① 年齢

20代 30代 40代 50代
1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

② 現在の校種及び担任等

(幼稚園)

年少 年長 その他
1 ——— 2 ——— 3

(小学校)

1年 2年 3年 4年 5年 6年 障害児 専科 その他
4 ——— 5 ——— 6 ——— 7 ——— 8 ——— 9 ——— 10 ——— 11 ——— 12

(中学校)

1年 2年 3年 障害児 学年つき その他
13 ——— 14 ——— 15 ——— 16 ——— 17 ——— 18

③ これまでの勤務経験について、おたずねします。

ア 養護学校に勤務されたことはありますか。

1 ある : (約 年間)
2 ない

イ 障害児学級を担任されたことはありますか。

1 ある : (約 年間)
2 ない

④ あなたが担当するクラスの中に、LD・AD/HD・アスペルガー症候群・高機能自閉症、あるいはそのようであろうと思われる状態により、学習面や生活面に特別な支援が必要と思われる子どもがいますか。

いる いない わからない
1 ——— 2 ——— 3

II 以下の各問にお答えください。(該当する番号を○で囲んでください)

【問1】

① LD 心理的擬似体験研修会(「通常学級における学習障害児等の支援の実際」H15.7.25 実施)に参加された方にお聞きします。

ア 内容について

1 大変参考になった 2 参考になった 3 あまり参考にならなかった
4 どちらともいえない
5 その他()

イ アで1または2を選択された方にお聞きします。どういうところが参考になりましたか。

ウ 今後もこうした研修会の必要性を感じますか。

1 とても感じる 2 感じる 3 あまり感じない
4 その他()

② 心理研修講座（「子どもの見方・捉え方—軽度発達障害という視点から—」H15.11.25 実施）に参加された方にお聞きします。

ア 内容について

- | | | |
|-------------|----------|----------------|
| 1 大変参考になった | 2 参考になった | 3 あまり参考にならなかった |
| 4 どちらともいえない | | |
| 5 その他（ | ） | |

イ アで1または2を選択された方にお聞きします。どういうところが参考になりましたか。

--

ウ 今後もこうした研修会の必要性を感じますか。

- | | | |
|----------|-----------|--------|
| 1 とても感じる | 2 あまり感じない | 3 感じない |
| 4 その他（ | ） | |

【問2】日々の教育活動の中で、LD・AD/HD・アスペルガー症候群・高機能自閉症など、軽度発達障害のある子ども、あるいはそのようであろうと思われる状態の子どもに関わってみえる方にお聞きします。困難を感じることを具体的に書いてください。あわせて子どもの状態についても書いてください。

--

【問3】LD・AD/HD・アスペルガー症候群・高機能自閉症など、軽度発達障害児への対応に関して、あなたは、今後どのような研修を受けていきたいですか。次の中からあてはまるものすべてを選んでください。

① テーマについて

- | | |
|--|---|
| 1 LD・AD/HD・アスペルガー症候群・高機能自閉症など、軽度発達障害児の特性について | |
| 2 特別支援教育をめぐる現状について | |
| 3 学校全体としてどのように支援していくかについて | |
| 4 通常学級における活動の中で、どのように支援していくかについて | |
| 5 軽度発達障害児を一斉の教科指導の中でどのように支援していくかについて | |
| 6 保護者と教育相談のあり方について | |
| 7 相談機関や医療機関へどのようにつないでいくかについて | |
| 8 その他（ | ） |

② 持ち方について

- | | | | |
|-----------------|---------|----------|------------|
| 1 講演会方式 | 2 講義と実技 | 3 事例検討方式 | 4 シンポジウム方式 |
| 5 パネルディスカッション方式 | | | |
| 4 その他（ | ） | | |

③ 講師について

- | | | |
|------------|---------|--------------------|
| 1 大学関係者 | 2 医療関係者 | 3 心理関係者（児童相談所職員など） |
| 4 教育現場の実践者 | | |
| 5 その他（ | ） | |

ご協力ありがとうございました